



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

「三人の聖者 ラーマクリシュナ③」

コルカタには「マザー」が二人いる。一人はノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサ (1910-1997) である。もう一人は、ホーリー・マザーことサーラダー・デーヴィー (1853-1920) である。後者について読者諸氏は知らないであろう。彼女こそラーマクリシュナの妻である。

(ちょっと待てよ。ラーマクリシュナは修行者、それに弟子たちは結婚していない。グルだけが結婚するなんてズルクない?)

しかも、ラーマクリシュナが23歳、サーラダーが5歳の時のことである。19世紀のベンガル農村ではよく見られた風習であった。

いわゆる幼児婚である。

先日テレビ番組を見ていたら、新妻が三十人以上の男性と性的関係をもったと自慢していた。司会者もあきれてびっくりだ。

(日本は性的に大らかだね)

インド社会(19世紀)ではありえないことだ。処女性が問題となる。処女と結婚するためには、幼児と結婚することが最も確かなことである。

なぜ修行者であるラーマクリシュナが結婚したか、ここでは触れない。一言付言しておく、世俗的な結婚ではなく、霊的な結びつきである。

そんなことよりも、サーラダー誕生には美しい物語がある。わが輩が訪れた中で、最も感動したベンガルの村が舞台である。彼女の母が実家から婚家に帰るとき、木の下に腰掛けた。その木から小さな女の子が降りてくるのが見えた。その子はやさしく彼女の首の辺りを抱擁した。たちまち気を失ってしまった。彼女はその少女が自分の胎内に宿ったのを感じた。その少女こそジャガダートリー女神であった。

現地の案内によると、青空トイレのために屈んだとある。

(おしっこではロマンがないので、伝記では省かれたのかなー)

静寂で長閑なベンガルの風景に、一本のベルの木がそびえている。美しい少女が母を抱擁する絵が飾ってある。

(なんと美しいことか!)

今回わが輩が同行した巡礼団は、関西組である。この人たちは組織に属することな

く、ただラーマクリシュナが好きな人たちである。

わが輩の独断だが、関東組「ヴィヴェーカーナンダ派」はインド哲学や思想に興味をもつ知的な人たちが多くはないだろうか。お笑い好きで人情味がある関西人はラーマクリシュナの人間臭いところ、ユーモアとアイロニーに感動する。

それゆえ、わが輩はラーマクリシュナにオヤジを付託してしまうという恐れ多い聖域侵犯をおかしてしまう。実に単純なのだ。

だからラーマクリシュナの子孫カナイ祭司に二十一年ぶりに再会したとき、シンプルに喜んだ。なんと、わが輩のことを覚えていた。

ラーマクリシュナの結婚は霊的なものなので直系子孫はいない。「子孫」と呼ぶのは、ラーマクリシュナの兄（次男）の息子シヴァラームの娘の家系につながるものことである。

カナイ祭司はやはりDNAを受け継いでいるのか、ラーマクリシュナにそっくりである。彼は賛歌を歌うと忘我になって涙が頬を伝って流れる。

とっくに亡くなっていると思っていたが、九十歳で健在であった。わが輩が部屋に入ると両手を広げて大きく手を打って迎えてくれた。巡礼団も大喜びだ。

我らは抱き合って再会を喜んだ。そこには哲学も思想もない。ただただ笑いあうだけの忘我の空間しかなかった。

追伸

わが輩と行くと常に出会いと感動がついてまわる。それを“奇跡”とわが輩は呼ぶ。